

## 文化三年 總持寺の大火について

圭室 文雄

はじめに

石川県輪島市門前にある曹洞宗大本山總持寺祖院の古文書調査に伺ったのは二〇〇一年のことです。その折対応して下さったのは、当時祖院の監院をつとめておられた江川辰三禪師でした。副寺は渡会正純師、事務局には中田善也氏が居られました。

江川禪師は始めて史料を全面公開されました。その後江川禪師は、多くの方が利用できるように史料を整理して目録を作成してほしいと要望されました。本年（令和四年）はそれから二十二年目にあたります。本年度中には総ての史料を整理し終わり、目録化できると思います。なお、経蔵に入っていた経典をふくめると、約二万六千点の史料が目録化されることになります。

多くの史料はこれまで利用されなかったものです。

これらの史料を使って若い研究者の方々に總持寺の歴史、更には曹洞宗史について優れた研究論文を書いていただきたいと思います。

さて、本日お話する曹洞宗の大火についてですが、總持寺には二回ほど大火がありました。文化三年（一八〇六）と、明治三十一年（一八九八）です。本日は江戸時代の文化三年の大火についてお話したいと思います。それではまず文化三年の大火直前の總持寺の経営状態について検討したいと思います。

## 第一章 文化三年の大火直前の總持寺の経営状態

一言で言えば總持寺の経営はきわめて苦しい状態であったといえます。当時の経営状況の実態が完全にわかる史料は殆ど残っていませんが、現在残っている断片的な史料でみてみたいと思います。

安永元年（一七七二）總持寺開山瑩山禪師に後桃園天皇から「弘徳圓明国師」の国師号が下賜されました。これは永平寺の歴代住職が天皇から勅賜禪師号（大僧正位）を受けており、權威付けられているので、これに對抗して總持寺は瑩山禪師にこれより高い国師号を望んだものと思われます。江戸時代の永平寺の禪師号取得は『世事見聞録』に次ぎのように記されています。

曹洞宗の惣本寺といへるは、越前永平寺なり、近來この本寺へ住職するには金貳千両を貯へざれば調度なり難しと云ふ、そのうち千両は諸支度始め入院の入院となり、また千両は禁裏参内の節、礼禄その外の入院なりと云ふと記されています。しかしこの二千両では実際には済みませんでした。天皇への推挙状は江戸幕府の将軍が書きますので、この礼金や、道中の旅費、住職就任後の儀式などの費用を含めると、金二千両では済まなかった、という記録も残っています。

ところで曹洞宗で国師号を取ったのは瑩山禪師が始めてです。この国師号取得については總持寺は江戸に使僧を派遣して、幕府寺社奉行や関三利との長い交渉が続いています。一方京都へも使僧を派遣し、道正庵や寺社伝奏勸修寺家とも同様に交渉を続けました。当然多くの費用がかかり、總持寺の寺院経営にも影響しました。

以上のような形で總持寺の權威を高め、転衣僧の数を増やし収入を拡大していく計画でしたが、経営は好転しませんでした。

總持寺が文化二年（一八〇五）作成した「香資願一件関三利え申入候記録第一」という史料が總持寺祖院に残されていますが、それによると、總持寺の年間収入総額は金一〇九一兩と記しています。その中の主な現金収入は末寺の転衣僧二〇〇名が一人金五兩（転衣料）ずつ上納するので、金一〇〇〇兩としています。

つまり転衣料は總持寺の現金の年間収入金全体の九割を占めています。このことから末寺の転衣僧の増加をはかる事が経営改善の必須条件であった事がわかります。

転衣僧の増加をはかる ところでこの時期の永平寺と總持寺の双方で合わせて毎年約四〇〇〇名の転衣僧がいますが、全国的に飢饉が続いた時期ですので、転衣僧が激減します。更に永平寺と總持寺を比較しますと毎年永平寺で転衣を取る者が多く、一方總持寺が少ない状態が続いています。何故なのか、最も大きな理由は地理的条件です。

転衣の辞令は最終的には京都の寺社伝奏である公家の勸修寺家が発給します。このことから地理的条件の悪い能登半島にある總持寺より、京都により近い永平寺に転衣僧が押しかけることになったと考えられます。

とりわけ京都より西にある近畿・中国・四国・九州の曹洞宗末寺の多くは總持寺末寺であっても永平寺で転衣を取得することが多くなりました。

これを解決する方法としては、先述のように總持寺の寺院の格式を高めるため国師号の取得でしたが、しかし転衣僧の増加は期待したほどではありませんでした。總持寺側が次ぎに考えたのは派別に本山で取得するように寺社奉行に命じてもらうことでした。同じ禅宗である臨済宗においては派別の本山で転衣を取っています。その他浄土真宗でも本山である東本願寺・西本願寺・仏光寺・専修寺などの本山で派別にとっています。

曹洞宗においても永平寺末寺と總持寺末寺はそれぞれの派別の本山で転衣を取る事を幕府寺社奉行に命じてもらい、

それを関三刹から全国の僧録寺院に連絡し、僧録寺院からそれぞれの曹洞宗末寺に連絡するという方法でした。

派別により転衣をとるということは、永平寺派末寺は永平寺で、總持寺派末寺は總持寺でそれぞれ転衣を申請すべきとした事です。この時期の末寺数の比率は永平寺派が約5%、總持寺派が約九五%となっています。

天明五年（一七八五）總持寺は江戸幕府寺社奉行に対して、幕府が本末制度を強化しているので、派別にそれぞれの本山で転衣を取得すべきだと主張しました。總持寺は長期にわたり江戸に塔司東源寺住職を派遣しました。東源寺住職は熱心に幕閣達を説得しています。曹洞宗内では当然の事ながら永平寺も関三刹も總持寺の動きに反対し、派別転衣はなかなか進行しませんでした。しかし總持寺は藩主である加賀藩前田氏の力を借りて老中・寺社奉行の説得を試みました。

その結果天明八年（一七八八）幕府寺社奉行は関三刹に対して「總持寺末寺は總持寺で転衣をとること」と命じました。翌年より總持寺への転衣は激増し、経営が安定しました。一方永平寺は収入が激減し、寺社奉行に元に戻すように上訴しました。

永平寺の理由づけは元和元年（一六一五）徳川家康が曹洞宗両本山に布達した永平寺諸法度・總持寺諸法度の中で「転衣の場所は派別で取る」とは記していないではないか、ということです。それゆえどちらの本山で取ってもいいはずだ、と主張しました。

寛政八年（一七九六）幕府寺社奉行脇坂安董は「転衣は両本山のどちらでもよし」とし、前寺社奉行の決定をくつがえしています。九年後にはもともとどつてしまいました。

總持寺の経営はその後もなかなか安定しませんでした。寛政十一年（一七九九）には借入金総額は一五、〇〇〇両となり、年間収入の一五年分になり、利息は一〇%ですので、一年分の支払いだけで一年分の現金収入を上回る金額になりました。

当然の事ながら貸し付けた回船問屋や商人達からは強く返済を求められ、加賀藩主前田家の寺社奉行や関三刹に訴える事態となりました。

文化元年（一八〇四）總持寺は手元不如意につき幕府寺社奉行に「香資願」を提出しています。その要旨は「永代にわたり總持寺末寺一か寺から銀三匁ずつの寄付金を毎年集めること」でした。總持寺派末寺数一七、八九三か寺に拠出させると、毎年銀五三貫六七六匁の収入になります。金に換算しますと銀六〇匁が金一両ですので、約金八九四兩三步になります。しかし翌年には總持寺の「香資願」は関三刹が反対し、幕府寺社奉行も幕府が儉約令を出している時期でもあるので、これは認められませんでした。

文化二年（一八〇五）関三刹は總持寺に対して「借入金総額」と「總持寺諸向省略明細帳」の提出を命じています。借入金総額は先述の寛政十一年からはかなり減少しましたが、依然として金六、八〇〇両としています。總持寺の年収の約七分分に当たる借金です。

このように總持寺は財政立て直しを図りつつある時、文化三年（一八〇六）大火に見舞われたのです。

## 第二章 文化三年の大火

まず兩本山のこの時期の末寺数について記しておきます。總持寺に残されている天明五年（一七八五）三月に作成された「一宗寺院本末寺数書帳」によると、永平寺末寺八七三か寺、總持寺の末寺は一七、八九三か寺、合計寺数は一八、七六六か寺になります。兩本山末寺の比率をだすと、永平寺四・七％、總持寺九五・三％の数字を得ます。曹洞宗末寺のうち總持寺の末寺が圧倒的に多かった事がわかります。

總持寺山内の様子 第1表をみて下さい。

の妙高庵、無端祖環の洞川庵、大徹宗令の伝法庵、実峰良秀の如意庵の五か寺で、これを五院とよんでいます。すなわち太源宗真が開山の普蔵院、通幻寂霊

第1表 總持寺山内五院塔司滅罪檀家数・屋敷坪数（明治4年＝1871現在）

	寺名	滅罪檀家数 (軒)	境内地面積 (坪)	備考
1	總持寺	1	5,670	津田玄蕃（前田家家臣）
2	五院 普蔵院	0		太源派
3	〃 妙高庵	0		通幻派
4	〃 洞川庵	0		無端派
5	〃 伝法庵	0		大徹派
6	〃 如意庵	0		実峰派
7	塔司 興禅寺	37	437	普蔵院末寺（石川 116）
8	〃 正覚寺	4	250	普蔵院末寺
9	〃 正福寺	5	260	普蔵院末寺
10	〃 長泉寺	2	400	普蔵院末寺
11	〃 芳春院	47	729	妙高庵末寺（石川 113）
12	〃 玉泉寺	4	290	妙高庵末寺（富山 51）
13	〃 昌寿寺	0	618	妙高庵末寺
14	〃 雲谷寺	0	280	妙高庵末寺
15	〃 円通院	2	255	妙高庵末寺
16	〃 太清院	3	440	妙高庵末寺
17	〃 宝幢寺	3	411	妙高庵末寺
18	〃 慶徳寺	7	323	洞川庵末寺（島根 271）
19	〃 東源寺	9	290	洞川庵末寺（東京 218）
20	〃 昌泉寺	1	300	洞川庵末寺
21	〃 秀翁院	5	222	洞川庵末寺
22	〃 覚皇院	109	3,917	伝法庵末寺（石川 114）
23	〃 千寧寺	0	181	伝法庵末寺
24	〃 永福寺	8	311	伝法庵末寺（石川 82）
25	〃 松岩寺	3	420	伝法庵末寺
26	〃 瑞雲寺	27	330	如意庵末寺
27	〃 青陽軒	5	438	如意庵末寺
28	〃 永寿院	1	1,600	如意庵末寺（長野 76）
	計	283	18,372	

参考文献

「金沢県寺院本末等取調帳」（『社寺取調類纂』所収） 国立国会図書館所蔵

注 備考欄の数字は『曹洞宗寺院名鑑』 平成17年版 曹洞宗宗務庁による

この五院の住職になれる輪番寺院がそれぞれに全国に散在しています。普藏院が二四か寺、妙高庵が三三か寺、洞川庵が三四か寺、伝法庵が三一か寺、如意庵が二九か寺です。合計すると一五一か寺になります。これら全国の末寺の住職が五名毎年交替で上山し、一年間住職を勤めます。毎年八月十五日開山瑩山禪師の命日が交替する日です。一方前年上山して一年間住職を勤めた人達はこの日の法要が終わると下山して自分の寺に帰ります。

つぎに第1表の下段に塔司二二か寺があります。これらの寺はいずれも上記の五院の末寺です。總持寺末寺では通幻派の末寺が約六〇%を占め、最も多いので塔司も七か寺あります。そのほかでは普藏院・洞川庵。伝法庵がいずれも四か寺、如意庵は三か寺を末寺として抱えています。これらの塔司はそれぞれの派別の全国の末寺から持ち込まれる紛争の解決、末寺住職の交替の事務手続き、五院ごとの末寺の僧侶が転衣取得のため上山したおりの宿舎、の役割があります。

滅罪檀家（葬祭檀家）は總持寺の中核である五院には一軒ありません。總持寺の檀家は江戸時代には前田家の家臣である津田玄蕃一軒のみでした。つぎに塔司の欄をみますと、覚皇院の一〇九軒が最も多く、二桁の檀家をもつのは芳春院・興禅寺・瑞雲寺のみで、他の塔司は一桁の檀家数が零で、とても檀家に依存して経営出来る数字ではありませんでした。

塔司の境内の面積は覚皇院の三九一七坪が最高で、永寿院・芳春院・昌寿院の順です。一か寺を除けばいずれも二〇〇坪を超える境内地を持っていました。

次に總持寺の山内にどの程度の人が住んでいたのかをみてみます。

總持寺山内に住んでいた人 史料は總持寺の人別帳（戸籍）です。江戸時代の中期から後期にかけて約一一〇年間にわたる時期で、一四回分残っています。

第2表 總持寺山内の居住者数

能登總持寺相院文書（人別帳より作成）

年号	西暦	五院	芳春院	覺皇院	塔司	總持寺	合計人数	僧の数
		住職	住職	住職	住職	家来		
享保17	1732	5	1	2	18	21 (男10 女10 道心者1)	82	29
宝曆6	1756	5	1	2	17	18 (男9 女8 道心者1)	80	44
明和5	1768	5	1	3	15	21 (男10 女10 道心者1)	90	51
明和8	1771	5	1	3	15	21 (男10 女10 道心者1)	80	41
安永3	1774	4	1	1	11	11 (男4 女7 道心者1)	69	43
安永9	1780	5	1	2	16	20 (男9 女10 道心者1)	96	56
天明6	1786	5	1	5	27	20 (男8 女11 道心者1)	97	60
寛政4	1792	4	1	3	25	9 (男5 女6 道心者1)	78	53
寛政10	1798	4	1	2	12	13 (男7 女5 道心者1)	73	44
文化1	1804	4	1	2	17	17 (男6 女5 道心者1)	78	45
文化7	1810	4	1	3	28	19 (男9 女9 道心者1)	95	56
文化13	1816	4	1	2	30	22 (男10 女11 道心者1)	97	56
天保10	1839	4	1	7	14	24 (男11 女13)	*120	78
天保12	1841	4	0	7	14	30 (男15 女15)	*139	87

注 \*印はこのほか衆僧15、飯頭調菜10、小者5、隠居1 を加え、実数は天保10年は151名、天保12年は170名となる。

まず五院ですが、住職は常に五人いるはずですが、寛政四年以降は総て四人です。この時期にはいずれかの寺の住職が欠員だったことがわかります。つまり地方の輪番担当寺院が上山してないからです。そのようなとき代行する役になるのは、第1表にあったその五院の末寺の塔司が勤めています。

塔司の中でも芳春院と覺皇院は別格です。芳春院は總持寺全体の総務的役割と経理を担当しています。覺皇院は後見役として対外的な仕事を担当しています。



塔司の項を見てください、二二か寺のうち芳春院と覺皇院を除くと二〇か寺になり、住職は二〇名いるはずですが、実際に二〇名いた年は一度もありません。一番多い時で一八名、最も少ない時は一名です。先述の如く滅罪檀家が少ない塔司は経営が苦しく、住職が定住しなかったことがわかります。

總持寺という欄を見てください。家来とありますが、これは僧侶以外の人物のことです。道心者とは仏門に帰依した篤信者とも言うべき人が一人居ます。注目すべきは女性の存在です。少ない時でも五名、多い時は一五名住んでいます。どのような仕事を担当していたかは記されていませんが、おそらく台所仕事をしていたと思われます。

下人とあるのは家来と同様に僧侶ではない人物と考えていいと思います。

僧侶資格を取っている者や修行中の者も含めここでは出家と記していると思います。

合計人数をみると最も少ない時でも六九名、多い時は表の欄外に示しているように、一七〇名とあります。總持寺の寺領は四百石です。平年作で年貢率を三五%とすると、収入は約一四〇石となります。成人男子一日の米飯は五合です。これを一年分にするると一・八石になります。この計算ですと約七八人分の飯米と言えます。この表でみると、七八名より少ない年は安永三年と寛政十年のみです。これ以外の年は米を別に購入しなければならなかったことがわかります。凶作となれば更に多くの米が必要になります。

次に門前村の様子についてみてみます。

門前村の様子 宝永三年（一七〇五）の總持寺祖院文書に「不高持門前家数之覚」という史料があります。門前村にはこの時四六軒ありますが、農民は一人も居ません。

表であきらかにように商人・職人だけです。職種別に検討してみると、最も多いのは大工で九軒、ついで葺師六軒、この他職人では畳屋二軒・曲師二軒・木挽二軒・紺屋二軒・鍛冶屋二軒、表具屋一軒・傘屋一軒などがあります。食品関係では酒屋三軒・豆腐屋二軒・室屋二軒・麴商売二軒、小間物屋・萬店売・油小売などがいずれも一軒ずつあり

第3表 門前町の商人・職人の様子

	職業	名前
1	酒屋・寺代官	星野源五郎
2	酒屋・寺代官	江尻理左衛門
3	菓子・麩商売	七左衛門
4	麩商売	平左衛門
5	小間物屋	茂兵衛
6	萬店売	忠右衛門
7	商人	助左衛門
8	表具屋	次郎兵衛
9	油小売	勘四郎
10	酒屋	加兵衛
11	傘屋	与兵衛
12	紺屋	又兵衛
13	紺屋	九左衛門
14	室屋	平右衛門
15	室屋	小兵衛
16	豆腐屋	作兵衛
17	豆腐屋	新助
18	畳屋	源蔵
19	畳屋	市兵衛
20	大工	武兵衛
21	大工	喜右衛門
22	大工	杢右衛門
23	大工	伊兵衛

	職業	名前
24	大工	善助
25	大工	太郎右衛門
26	大工	左助
27	大工	利左衛門
28	大工	半兵衛
29	葺師	名兵衛
30	葺師	七兵衛
31	葺師	間兵衛
32	葺師	清右衛門
33	葺師	与助
34	葺師	助三郎
35	木挽	久兵衛
36	木挽	長兵衛
37	まけし	宗兵衛
38	まけし	善兵衛
39	鍛冶屋	伊右衛門
40	鍛冶屋	茂兵衛
41	日用	六兵衛
42	日用	傳左衛門
43	日用	四郎三郎
44	日用	吉左衛門
45	日用	助右衛門
46	日用	庄八

参考文献

宝永2年(1705)「不高持門前家数之覚」總持寺祖院文書 「門前」5

ます。また日用とあるのは日傭取で、日雇い労働者の事です。六軒あります。しかし門前村に住んでいる人々はこの史料でみると、いずれも總持寺と繋がりのある職業が多い事がわかります。それゆえ門前村の人々の生活も總持寺が支えていたといっても過言ではありません。

以上の中でとりわけ目立つ数字は大工・葺屋・日用などです。五院・塔司を含めて大伽藍も多く、江戸時代には建物だけでも七〇数棟あったと記されていますので、常に建築物の修復・改築が行われていた事がわかります。山内には大工小屋や材木小屋が常設されていました。また建築にともない労働力は常に必要でした。

文化三年の大火 總持寺の五院の一つ如意庵から出火したのは文化三年

第4表 總持寺焼失堂宇坪数書上 文化3年(1806)現在

	焼失堂宇	坪数
1	大門	4
2	小門	16
3	山門	34
4	山門回廊	9
5	浴室	32
6	大庫裏	191
7	大庫裏玄関	6
8	兩侍真寮	80
9	現方丈	22
10	現方丈板の間	4
11	方丈	280
12	方丈玄関	14
13	方丈回廊(左)	14
14	方丈回廊(右)	14
15	方丈廊下箱段	8
16	仏殿	94
17	無縫塔	4
18	観音堂	3
19	禪堂	45
20	禪堂庫裏	11

	焼失堂宇	坪数
21	維那寮	63
22	維那寮玄関	4
23	妙高庵	143
24	妙高庵玄関	5
25	妙高庵短廊	15
26	妙高庵庫裏	81
27	伝法庵	83
28	伝法庵玄関	5
29	伝法庵短廊	7
30	伝法庵庫裏	38
31	如意庵	92
32	如意庵玄関	5
33	如意庵短廊	6
34	浄頭	30
35	鐘楼堂	6
36	収納蔵	13
37	材木蔵	30
38	作事小屋	44
39	白山宮拝殿	8
	合計	1563

注 「山内52」「文化3寅年正月21日總持寺諸堂炎上箇所間数書」(『本  
山門内火災につき加州金沢寺社所江指出書付留』)

(二八〇六) 一月二十一日のことでした。

同年一月二十七日總持寺が加賀藩寺社奉行へ提出した報告書(祖院文書山内五三)によるとつぎの通りです。

一月二十一日曉六つ時(午前六時頃) 当山五院のうち如意庵客殿より出火、門(山)内一同別紙目録の通り類焼し候、

もつとも人数早速相集まり防ぎ候得共、折悪しく

西風激しく、所詮防ぎ方人力にはしがたき仕

合に御座候、同日午の刻(正午) ようやく相防

ぎ申候、門(山)内のうち普蔵院・洞川庵並に

土蔵一つ・輪蔵・勅使橋焼失これなく相残り候

と記しています。①火災の発生時刻は午前六

時頃、②火元は如意庵客殿、③早速多くの人が

駆けつけたが、西風強く防ぎきれず、大半の伽

藍が焼失した、④出火後約六時間燃え続け、多

くの伽藍が焼失した、⑤五院で焼け残ったのは

普蔵院・洞川庵のみ、などと記しています。

当時の伽藍配置の絵図をみると、総ての

建物が回廊で繋がっていたので、廊下を伝わっ

て次々に焼け移ったと思われます。

この時焼けた建物は第4表の通りです。

この時建坪百坪を越えるのは方丈の二八〇坪、大庫裏一九一坪、五院の一つである妙高庵一四三坪です。その他八〇坪以上の建物は仏殿・如意庵・伝法庵・妙高庵庫裏・両侍真寮などが続きます。焼失建物は三九棟、焼失坪数は一、五六三坪と、かなりの建物が焼失したことがわかります。

文化四年（一八〇七）總持寺は加賀藩を通じて幕府へ「再建勸化願」を提出します。最初の計画では金一六万五千兩を集めることでした。しかし幕府寺社奉行への窓口である関三利が反対し、なかなか進展せず、總持寺から江戸へ出向きいつときは一万五千兩までに減額し、粘り強く交渉しますが、うまくいかず、總持寺は改めて加賀藩主前田家に仲介してもらい交渉を続けました。

文化六年（一八〇九）幕府寺社奉行は總持寺の「再建勸化願」を許可しました。しかし勸化金額（寄付金）は金四万八千兩に削減されました。さらに全国末寺から寄附を集める期間を五年間とされました。

全国の僧録に派遣された勸化僧 文化七年（一八一〇）總持寺は全国の僧録寺院へ勸化僧一七名を派遣しています。勸化僧は約一年かけてきめられた地域を廻り総ての寺から、總持寺が割り付けた金額を五年以内に納入するという請書（承諾書）に印鑑を押してもらうことでした。派遣された寺院は第5表の通りです。

總持寺の山内からは塔司覚皇院の二か寺のみです。国別で見ると能登国五か寺、加賀国四か寺、越中国六か寺、越前国二か寺です。なお関東地方は江戸に常駐している曹洞宗触頭関三利が行うとしています。

備考欄にあるそれぞれの勸化僧は当該の寺院住職と伴僧一人、僕（僧でない人物）の三人でチームを組んでいます。他の寺の分には記載がありませんが、同様の人数と思われます。

總持寺が文化七年再建勸化金徴収の使僧として派遣した越中国新川郡滑川村徳城寺が担当する丹後国・伯耆国・因幡国にどのような物を持っていたかについてみてみます。

まず徳城寺が担当する三か国にどの程度の曹洞宗末寺があったのか調べてみます。祖院文書には次ぎのような史料

文化三年 總持寺の大火について

第5表 總持寺再建勸化金徴収の使僧寺院 文化7 (1810)

	国名	郡名	村名	勸化僧寺院	主な廻国先	備考
1	能登	鳳至	櫛比	覚皇院	陸奥(仙台・梁川・南部・八戸)	
2	能登	鳳至	八ノ田	洞雲寺	信濃・三河・尾張	
3	能登	鳳至	中居	大龍寺	上総・安房・〔甲斐〕	住職1・伴僧1・僕1
4	能登	珠洲	馬渚	守禅庵	佐渡	
5	能登	鹿島	小島	龍門寺	出羽(米沢・庄内・秋田・新庄・上ノ山・矢島・本庄・亀田・由利・山形)・石見・出雲・隠岐・周防・長門	
6	加賀	金沢	卯辰	宗龍寺	肥前・肥後・日向・薩摩・〔大隅〕	
7	加賀	金沢	野田寺町	祇陀寺	武蔵	住職1・伴僧1・僕1
8	加賀	金沢		太岩寺	美濃・越前・伊勢・近江	
9	加賀	金沢		広誓寺	若狭・山城・大和・河内・和泉・摂津・丹波・丹後・但馬	
10	越中	新川	眼目	立川寺	〔出羽〕・越後(高田・村上・岩瀬・滝谷・上田・新発田・長岡)	住職1・伴僧1・僕1
11	越中	新川	滑川	徳城寺	丹後・伯耆・因幡	
12	越中	婦負	寒江	自得寺	豊前・豊後・筑前・筑後・壱岐・対馬	
13	越中	婦負	深谷	祇樹寺	遠江・伊豆・飛騨	
14	越中	婦負	片掛	大淵寺	甲斐・信濃	
15	越中		桜谷	長慶寺	志摩・紀伊・伊賀・阿波・讃岐・伊予・土佐	
16	越前	南条	高瀬	宝円寺	松前・陸奥(会津・津軽・相馬・白河・棚倉・磐城・須賀川・三春・二本松)・信濃	住職1・伴僧1・僕1
17	越前			正瑞寺	遠江(可睡斎)・播磨・備前・備中・備後・美作・安芸	
18	(江戸)				常陸・上野・下野・上総・下総・安房・武蔵・相模	この国は江戸にて取り計らい

が残っています。丹後国には宝永三年（一七〇六）四月「丹後加佐郡田辺桂林寺末寺帳」に三八か寺、同年五月「丹後宮津智源寺寺院帳」に一九か寺、宝永五年（一七〇八）六月「伯州曹洞宗寺院帳」九四か寺、それぞれ所収されています。しかし因幡国のこの時期の史料は祖院には残されていないので、大本山總持寺に残っている延享四年（一七四七）十一月「曹洞宗寺院本末帳」で補正すると、因幡国の末寺は六三か寺所収されています。

この總持寺と祖院の末寺帳の寺数を合計すると、この三か国で三三四か寺の末寺があり、使僧徳城寺はこれらの寺を廻り、それぞれの寺に勸化金を割付け、五年間に支払ってもらおう保証を取り付け、新しく作成した勸化新帳に押印してもらったことでした。総ての寺を廻る事ができない場合はその地域の僧録寺院に末寺を集めてもらい、請印をとることもありました。

文化七年八月、總持寺役局は使僧十七か寺に「本山より勸化僧江渡物賞帳」をわたしました。内容は次ぎの如く記されています。

#### 覚

- 一、勸化新帳
- 一、勸化古帳写
- 一、須知状 壺通
- 一、惣書簡 壺通
- 一、録寺行書簡 六本
- 一、役局より頼状 三通
- 一、往來通手形 壺通
- 一、本山絵図 壺枚

一、関三刹触状写 壺通

一、関三ヶ寺□□附状 壺通

覚

錦掛絡 式両以上 壺か寺

紹金紗金襴掛絡 壺両以上 拾七か寺

紗金掛絡 式歩以上 拾四か寺

八匁風呂敷 壺歩以上 七拾貳か寺

五匁風呂敷 式朱以上 三拾九か寺

三匁風呂敷 五匁以上 貳拾か寺

止宿用風呂敷 式匁壺分五厘 五拾片

止宿用風呂敷 壺匁四分九厘 三拾片

珞扇子 五拾本

右之通今度相渡遣候之條、被相勤歸国之上、書物返却音物遣弘之儀者、別帳を以勘定可被成、以上

午（文化七）八月 總持寺役局

とあります。

前段の「覚」の所で「勸化新帳」とあるのは今回の再建勸化金を末寺に割り当てた帳面、「勸化古帳」とは瑩山禪師・峨山禪師遠忌勸化の折の帳面、須知状とは一般的に云えば備忘録とか覚書と言われるものですが、この場合は使

僧が再建勸化金を徴収するに当たっては非伝えなければならぬ事を記した覚書といえるかと思ひます。惣書簡とは後に記す第7表に示した文章と思われまゝ。

録寺行書簡とは、僧録寺院に渡す手紙の事です。僧録寺院は幕府寺社奉行の下にある曹洞宗触頭関三利の支配を受けます。曹洞宗の僧録寺院は全国で一〇七か寺あります。この使僧徳城寺が担当する三か国の僧録寺は丹後国は宮津智源寺・田辺桂林寺、因幡国は鳥取景福寺、伯耆国は和田定光寺・八橋退休寺の五か寺です。それぞれの地域の元締め役割の寺です。で總持寺から特に依頼状を出しています。往來通手形は関所を通る時の通行手形です。本山絵図は焼失箇所を説明するため持たせたものです。関三利触頭は曹洞宗触頭からの總持寺勸化金提出への依頼状です。

後半の覚は勸化金の献金額により渡すものの区別です。これは材質によりかなり差があつたようです。風呂敷まで含めれば總ての寺に音物がわたるようであつたと思われまゝ。

文化八年（一八一二）には、再建する堂塔伽藍についての程度の建築費がかかるか見積書を取つています。第6表がそれです。

まず建築物の名前、銀高とあるのは建築費です。代金とあるのは銀高を銀六〇匁Ⅱ金一両ですので、それに換算した数字です。つぎに坪数は建物の建坪です。坪単価は一坪あたりの建築費を金で表示したものです。

建築費が高額なのは祖堂・仏殿・山門・大庫裏・妙高庵客殿の順です。坪数が大きいのは妙高庵客殿・祖堂・大庫裏・僧堂・仏殿の順です。坪単価が高いのは山門・勅使門・仏殿・開山廟塔・通用門の順です。

建築見積金額は幕府が認めた勸化金額金四万八千二〇両三步をやや下回る金額であつた事がわかります。つぎに第7表をみて下さい。



文化三年 總持寺の大火について

第6表 能州總持寺焼失諸堂舎再建入用金積立帳 (文化8年=1811)

	建築物他	銀高 (貫)	代金 (兩)	坪数	坪単価 (兩)
1	祖堂 (玄関を含む)	564.178	9403.0	252.84	37.2
2	仏殿	430.255	7171.0	90.25	79.5
3	山門	374.045	6234.1	32.00	194.8
4	山門左右山廊	2.405	40.1	6.00	6.7
5	勅使門	63.323	1055.4	7.50	140.7
6	通用門	26.806	446.8	10.00	44.7
7	現方丈	95.394	1589.9	42.50	37.4
8	放光閣	79.871	1331.2	65.00	20.5
9	大庫裏	257.954	4299.0	190.66	22.5
10	僧堂	82.786	1379.8	95.45	14.5
11	維那寮・知客寮	42.626	710.4	63.00	11.3
12	如意庵客殿	133.824	2230.4	83.00	26.9
13	如意庵庫裏	41.190	686.5	42.00	16.3
14	伝法庵客殿	133.820	2230.0	79.00	28.2
15	伝法庵庫裏	49.925	832.0	45.00	18.5
16	妙高庵客殿	238.073	3967.9	277.43	14.3
17	妙高庵庫裏	72.075	1201.0	73.50	16.3
18	開山廟塔	9.595	160.0	2.80	57.1
19	鐘樓	17.999	300.0	7.50	40.0
20	観音堂	10.350	172.5	4.00	43.1
21	白山宮拝殿	5.838	97.3	20.25	4.8
22	浴室	8.272	137.9	32.00	4.3
23	七軒浄頭	8.568	142.8	32.00	4.5
24	回廊	56.742	945.7	317.25	6.1
25	築地塀	14.759	246.0		
26	庫裏物置	3.000	50.0	4.00	12.5
27	土蔵	9.500	158.3	5.00	31.7
28	土蔵	13.500	225.0	9.00	25.0
29	井戸屋形	6.000	100.0		
30	高塀	7.000	117.0		
31	材木蔵	8.200	137.0	40.00	3.4
32	作事小屋	4.000	66.7	154.00	0.4
	合計	2871.873	47864.7	2082.93	[22.8]

参考文献 總持寺祖院文書「遠忌・勸化 No 344」

第七表 合銀貳千八百八拾壹貫貳百五拾壹匁

此金四万八千貳拾兩三分余 但金壹兩に付銀六拾目替

右者今般御奉行所江書上候再建素立積金高ニ有之候、諸造作皆出来並焼失之諸道具法器等全供致候迄者、関三利方江入披見候通惣積高金拾壹万兩余相掛り候儀候得者、時節柄ト申大造之儀ゆへ所詮出来申間敷ト存候得共、何卒年限相掛り候共、責而有形遂素立成共可なりに再建出来致、御朱印御条目並祖訓之通り、本山職法要茂相勤候様致度、一山之志願ニ候、誠ニ今般之儀者、諸寺院之丹精荷担無之候而者、夫々再建ト申筋ニモ難及、万一出来兼候節者不得止事、又候再勸化相頼申入候筋茂有之候間、何分前後一度ニ再建及円成候様、格別荷担之志慮を以、右積り金高、寺檀相当之出化偏所希候、以上  
文化八年未二月下澆

總持寺

役局 印

諸国曹洞宗諸寺院

〔能州總持寺焼失諸堂舎再建入用金積立帳〕の奥書

總持寺祖院文書「遠忌・勸化No344」

第7表は總持寺から派遣された勸化僧が担当する地域を廻る時、その地域の僧録寺院に渡した書状です。ここに集める金額の総額が金四万八千二〇兩三步と記されています。なお後半には、若しこの金額を集めることが出来なかったならば、再度勸化金を徴収すると、強い決意で望んでいることがわかります。つぎの第8表は国別の再建勸化金の徴収高です。

この表では甲斐国・淡路島・大隅国は空白で不詳ですが、別の史料で甲斐国のみはわかります。それによると金千二百四一兩と記されています。これを含めると総額は金五万一千三百九十五兩になり、幕府寺社奉行が許可した金額をこの段階で超えています。

第8表 總持寺再建勸化金国別徴収高（文化9年2月 1812）

	国名	徴収金額（兩）	順位
1	松前	77	
2	出羽	2415	④
3	陸奥	3051	③
4	常陸	482	
5	上野	1451	⑨
6	下野	574	
7	安房	180	
8	上総	270	
9	下総	45	
10	武蔵	6896	①
11	相模	1039	
12	甲斐		
13	伊豆	234	
14	駿河	951	
15	遠江	1913	⑥
16	三河	810	
17	尾張	643	
18	美濃	386	
19	飛騨	153	
20	伊勢	284	
21	志摩	116	
22	伊賀	95	
23	信濃	1719	⑦
24	越後	6140	②
25	佐渡	257	
26	越中	1037	
27	能登	823	
28	加賀	602	
29	越前	219	
30	若狭	465	
31	近江	286	
32	山城	361	
33	大和	378	
34	河内	214	
35	和泉	106	

「遠忌・勸化 397～399」

	国名	徴収金額（兩）	順位
36	摂津	1350	⑩
37	紀伊	291	
38	丹波	1591	⑧
39	丹後	292	
40	但馬	504	
41	播磨	1020	
42	淡路		
43	因幡	195	
44	伯耆	816	
45	出雲	661	
46	石見	747	
47	隠岐	20	
48	美作	192	
49	備前	40	
50	備中	1253	
51	備後	335	
52	安芸	130	
53	周防	491	
54	長門	633	
55	阿波	50	
56	讃岐	36	
57	伊予	258	
58	土佐	146	
59	筑前	250	
60	筑後	68	
61	豊前	212	
62	豊後	531	
63	肥前	2306	⑤
64	壱岐	90	
65	対馬	133	
66	肥後	436	
67	日向	88	
68	薩摩	317	
69	大隅		
	合計	50154	

一応徴収高の順位を記してみました。ベストテンのうち東北・関東・信越・東海地方つまり東国が七か国はいり、圧倒的に東国にかたよっていることが明らかです。西国で目立つのは攝津国・丹波国、更に九州の肥前国です。このことから曹洞宗寺院が東国にきわめて多いことを示しています。

第9表 總持寺 諸堂宇再建年代表 (天保2年=1831)

	年号	西暦	堂宇名	建築費 (両)
1	文化3	1806	妙高庵飯屋 (五院)	55
2	文化3	1806	伝法庵飯屋 (五院)	70
3	文化3	1806	如意庵飯屋 (五院)	57
4	文化7	1810	客殿から庫裏への廊下	79
5	文化7	1810	道具納屋 (8坪)	282
6	文化8	1811	観音堂 (4坪)	128
7	文化9	1812	客殿 (372坪)	4445
8	文化9	1812	神明宮	149
9	文化9	1812	勅門普請小屋	37
10	文化10	1813	勅門	1000
11	文化10	1813	維那寮 (77坪)	398
12	文化10	1813	仮維那寮・待真寮取潰	15
13	文化11	1814	青陽軒再建 (塔司)	80
14	文化11	1814	諸堂宇再建建式	72
15	文化11	1814	禅堂 (66坪) 海老屋寄付	
16	文化13	1816	大庫裏 (182坪)	3000
17	文化13	1816	飯山門	162
18	文化13	1816	伝法庵庫裏 (五院・42坪)	197
19	文化13	1816	如意庵庫裏 (五院・73坪)	174
20	文化13	1816	永福寺再建 (塔司)	431
21	文化13	1816	太清院 (塔司)	101
22	文化13	1816	飯鐘楼	16
23	文化14	1817	仏殿 (81坪)	4626
24	文化14	1817	現方丈 (25坪)	1510
25	文化14	1817	浴室 (32坪)	231

	年号	西暦	堂宇名	建築費 (両)
26	文化14	1817	七間浄頭 (32坪)	125
27	文政1	1818	客殿 (山崩再建・460坪)	2901
28	文政1	1818	山崩土除入用	194
29	文政1	1818	惣廻廊	347
30	文政1	1818	待真寮再建	285
31	文政3	1820	法器・諸道具買入れ	409
32	文政4	1821	道具土蔵 (40坪)	145
33	文政5	1822	通用門	346
34	文政5	1822	無縫塔	181
35	文政8	1825	妙高庵庫裏 (五院・40坪)	240
36	文政9	1826	妙高庵客殿 (117坪)	1009
37	文政9	1826	妙高庵廊下	90
38	文政10	1827	如意庵庫裏 (五院)	77
39	文政10	1827	正福寺再建 (塔司)	39
40	文政11	1828	伝法庵客殿 (五院・76坪)	800
41	天保1	1830	玉橋懸替	69
42	天保1	1830	鐘楼堂 (6坪)	300
43	天保2	1831	額 (御門)	6
44	天保2	1831	棟上式	50
45			額 (伝法庵・妙高庵・如意庵・仏殿)	35
46			客殿前井戸	15
47			年貢米蔵 (5坪)	20
48	嘉永4	1851	如意庵客殿 (五院・77坪)	795
	合計			2593

参考文獻 「諸堂舎造営記附宝塔修工記併題」(『新修門前町史』資料編3)より作成

第9表は諸堂宇が建設された時期と実際の建築費用を記しました。

一応大半の堂宇が出来上がったのは文政十一年頃（一八二八）と考えていいと思います。大火から二三年後となります。大火の火元であった如意庵客殿が建てられたのは最後で、大火から四六年後のことでした。

ところで建築費用は金二万五千七百九十三両で、勸化金として集めた金額の約半分でした。しかし大火から総て完成するまでの四六年間にわたる様々な出費、江戸・京都・金沢への長期間の出張、勸化僧達の滞在費・交通費・日当を含む廻国費用など、建築費以上に間接経費が増大したこと、一方で前々からの借入金や利子の支払いなどが思いの外かかっています。以上の事から支出は増大して總持寺の経営が安定することはなく、まだ多くの借入金が残ることになりました。

なお再建勸化金徴収の場合収入金額の三〇％は大本山總持寺に直接納入されましたが、残りの七〇％は関三利が集めています。大本山總持寺より関三利の方がかなり支配力を持っていた事が明らかです。

関三利は再建勸化金の一部をあずかり、江戸で貸付金として活用しています。具体的にみると関三利の大中寺・総持寺・龍穩寺は總持寺再建勸化金の中から総額で約金七千両をあずかり、江戸で十く十二％の利子で曹洞宗の末寺に貸付け、若干の手数料を差し引き残りの利息を大本山總持寺に送金していました。しかしこれも一〇年ほど経つと関三利は大本山總持寺に対して全く送金しなくなりました。總持寺は毎年催促しますが、関三利はいずれも拒否、元金も返済されずに明治維新を迎えます。

むしろ 大本山總持寺の大火から幕末にかけての様子を、史料を中心に検討してみました。大本山總持寺の寺院経営はなかなか改善されなかったことが明らかになりました。転衣に依る収入増加もままならず、この地域の檀家獲得も浄土真宗東本願寺派末寺に大半握られており、總持寺五院・塔司二か寺の檀家数合計で二八三軒に過ぎず、一方で人別帳でも明らかのように、常時山内には八〇く九〇名の住人が居り、幕末には一五〇名を越える人々が住んで

おり、また門前の人々の生活も支えていた總持寺にとって経営を安定させるのは不可能だったと思います。

さらに明治初年には加賀藩からの寺領も取り上げられ、明治政府の廃仏毀釈の嵐にもさらされ、これまでほぼ義務付けられていた僧侶が本山で転衣をとる制度も廃止され、収入源を断たれた大本山總持寺は厳しい経営が続くことになりました。

現在の門前町地域に限っても、真宗大谷派（東本願寺派）劔地光琳寺は檀家八一三軒、阿岸本誓寺は五六〇軒の檀家を抱えています。寺院数で見てもこの地域の曹洞宗寺院は四か寺しかないのになんとして、真宗大谷派寺院は四四か寺存在しています。真宗王国の中における總持寺の存在は末寺や檀家の獲得に対して誠に不安定な状況であった事がわかります。

（たまむろ ふみお・明治大学名誉教授）